

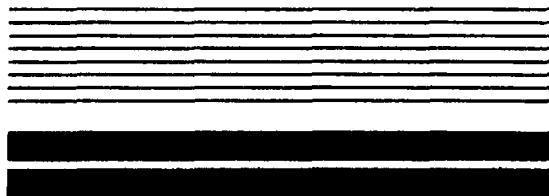
日本文学全集

26

林芙美子・円地文子

放浪記・浮雲
なまみこ物語・二世の縁 拾遺・他

河出書房



林芙美子・円地文子



カラー版日本文学全集 26

1968©

昭和四十三年九月二十日 初版印刷
昭和四十三年九月三十日 初版発行

定価 七五〇円

著者 林芙美子
円地文子

発行者 中島隆之

印刷者 草刈親雄

装幀者 亀倉雄策

本文印刷 中央精版印刷株式会社

口絵印刷 凸版印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

製函 加藤製函印刷株式会社

本文用紙 本州製紙株式会社

クロース 日本クロス工業株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三丁目六番地

電話 東京(292)三七二(大代表) 振替 東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

林 芙美子

放浪記……………五

浮雲……………九

円地文子

なまみこ物語……………三五

ひもじい月日……………三九

耳環珞……………三二

二世の縁拾遺……………三三

注 年 解 卷 色
釈 譜 説 頭 刷
釈 積 説 写 挿 画

放浪言
浮雲
なまみこ物語
耳環塔

保昌正夫 三五
和田芳恵 三五
和知子 三五
竹西寛子 三三
榑原和夫 三三
中島清之 三三
北沢映月 三三

林
芙
美
子

放
浪
記*

放浪記以前

私は北九州の或る小学校で、こんな歌を習ったことがあった。

更けゆく秋の夜、旅の空の
 侘しき思いに 一人なやむ
 恋いしや古里 なつかし父母

私は宿命的に放浪者である。私は古里を持たない。父は四国の伊予の人間で、太物の行商人であった。母は、九州の桜島の温泉宿の娘である。母は他国者と一緒になったというので、鹿児島を追放されて父と落ちつき場所を求めたところは、山口県の下関という処であった。私が生れたのはその下関の町である。——故郷に入れられなかった両親を持つ私は、したがって旅が古里であった。それ故、宿命的に旅人である私は、この恋いしや古里の歌を、随分侘しい気持ちで習ったものであった。——八つの時、私の幼い人生にも、暴風が吹きつけてきたのだ。若松で、呉服屋の糶売をして、かなりの財産をつくっていた父は、長崎の沖の天草から逃げて来た浜という芸者を家に入れていた。雪の降る旧正月を最後として、私の母は、八つの私を連れて父の家を出てしまったのだ。若松というところは、渡し船に乗らなければ行けないところだと覚えている。

今の私の父は養父である。このひとは岡山の人間で、実直過ぎるほ

どの小心さと、アブノーマルな山ツ気とで、人生の半分は苦勞で埋れていた人だ。私は母の連れ子になって、この父と一緒にになると、ほとんど住家というものを持たないで暮して来た。どこへ行っても木賃宿ばかりの生活だった。「お父つあんは、家を好かんとじゃ、道具が好かんとじゃ……」母は私にいつもこんなことを言っていた。そこで、人生いたるところ木賃宿ばかりの思い出を持って、私は美しい山河も知らないで、養父と母に連れられて、九州一円を転々と行商をしてまわっていたのである。私をはじめて小学校へはいったのは長崎であった。ざつこく屋という木賃宿から、その頃流行のモスリン改良服というのをきせられて、南京町近くの小学校へ通って行った。それを振り出しにして、佐世保、久留米、下関、門司、戸畑、折尾といった順に、四年の間に、七度も学校をかわって、私には親しい友達が一人も出来なかった。

「お父つあん、俺アもう、学校さ行きとやなかい……」

せつぱつまった思いで、私は小学校をやめてしまったのだ。私は学校へ行くのが厭になつていたので。それはちやうど、直方の炭坑町に住んでいた私の十二の時であつたらう。「ふうちゃんにも、何か売らせましようたいなあ……」遊ばせてはモッタイナイ年頃であつた。私は学校をやめて行商をするようになったのだ。

直方の町は明けても暮れても煤けて暗い空であつた。砂で漉した鉄分の多い水で舌がよれるような町であつた。大正町の馬屋という木賃宿に落ちついたのが七月で、父達は相変らず、私を宿に置きっぱなしにする、荷車を借りて、メリヤス類、足袋、新モス、腹巻、そういう物を行李に入れて、母が後押しして炭坑や陶器製造所へ行商に行っていた。

私には初めての見知らぬ土地であつた。私は三銭の小遣いを貰い、それを兵兎帯に巻いて、毎日町に遊びに出ている。門司のように活気

のある街でもない。長崎のように美しい街でもない。佐世保のように女のひとが美しい町でもなかった。骸炭のザクザクした道をはさんで、煤けた軒が不透明なあくびをしているような町だった。駄菓子屋、うどんや、屑屋、貸布団屋、まるで荷物列車のような町だ。その店先には、町を歩いている女とは正反対の、これは又不健康な女達が、尖った目をして歩いていた。七月の暑い陽ざしの下を通る女は、汚れた腰巻と、袖のない襦袢ざりである。夕方になると、シャベルを持った女や、空のモッコをぶら下げた女の群が、三々五々しゃべくりながら長屋へ帰って行った。

流行歌のおいとこそうだよの唄が流行っていた。

私の三銭の小遣いは双児美人の豆本とか、氷饅頭のようなもので消えていた。——間もなく私は小学校へ行くかわりに、須崎町の粟おこし工場に、日給二十三銭で通った。その頃、箆をさげて買いに行っていた米が、たしか十八銭だったと覚えていた。夜は近所の貸本屋から、腕の喜三郎や横紙破りの福島正則、不如帰、なごぬ仲、渦巻などを借りて読んだ。そうした物語の中から何を教つたのだろうか？メデタシ、メデタシの好きな、虫のいい空想と、ヒロイズムとセンチメンタリズムが、海綿のような私の頭をひたしてしまつた。私の周囲は朝から晩まで金の話である。私の唯一の理想は、女成金になりたいという事だった。雨が何日も降り続いて、父の借りた荷車が雨にさらされると、朝も晩も、かぼちゃ飯で、茶碗を持つのがほんとうに淋しかった。

*

この木賃宿には、通称シンケイ（神経）と呼んでいる、坑夫上りの狂人が居て、このひとはダイナマイトで飛ばされて馬鹿になった人だと宿の人が言っていた。毎朝早く、町の女達と一緒にトロッコを押しに出かけて行く気立ての優しい狂人である。私はこのシンケイによく

虱を取つてもらつたものだ。彼は後で支柱夫に出世したけれど、外に、島根の方から流れて来ている祭文語りの義眼の男や、夫婦者の坑夫が二組、まむし酒を売るテキヤ、親指のない淫売婦、サーカスよりも面白い集団であつた。

「トロッコで圧されて指を取つた言いよるけんど、嘘ばんだ、誰ぞに切られたつとじやろ……」

馬屋のお上さんは、片眼で笑いながら母にこう言っていたものだ。或る日、この指のない淫売婦と私は風呂に行つた。ドロドロの苦むした暗い風呂場だった。この女は、腹をぐるりと一巻きにして、臍のところには朱い舌を出した蛇の文身をしていた。私は九州で初めてこんな妻い女を見た。私は子供だったから、しみじみ正視してこの薄青いこわい蛇の文身を見ていたものだ。

木賃宿に泊っている夫婦者は、たいてい自炊で、自炊でない者達も、米を買つて来て炊いてもらつていた。

ほうろくのように焼けた暑い直方の町角に、そのころカチュウシヤの絵看板が立つようになった。異人娘が、頭から毛布をかぶつて、雪の降っている停車場で、汽車の窓を叩いている凶である。すると間もなく、頭の真ん中を二つに分けたカチュウシヤの髪が流行つて来た。

カチュウシヤ可愛いや 別れの辛さ

せめて淡雪 とけぬ間に

神に願いを ララかけましようか。

なつかしい唄である。この炭坑街にまたたく間に、このカチュウシヤの歌は流行してしまつた。ロシヤ女の純情な恋愛はよくわからなかつたけれど、それでも、私は映画を見て来ると、非常にロマンチックな少女になつてしまつたのだ。浮かれ節（浪花節）より他に芝居小屋に連れて行つてもらえなかつた私が、たった一人で隠れてカチュウシヤの映画を毎日見に行つたものであつた。当分は、カチュウシヤで夢

見心地であった。石油を買いに行く道の、白い夾竹桃の咲く広場で、町の子供達とカチュウシヤごっこや、炭坑ごっこをして遊んだりもした。炭坑ごっこの遊びは、女の子はトロッコを押す真似をしたり、男の子は炭坑節を歌いながら土をほじくって行くしぐさである。

そのころの私はとても元気な子供だった。

一カ月ばかり勤めていた粟おこし工場の二十三銭にもさよならをする、私は父が仕入れて来た、扇子や化粧品を鼠色の風呂敷に背負って、遠賀川を渡り隧道を越して、炭坑の社宅や坑夫小屋に行商して歩くようになった。炭坑には、色々な行商人が這入り込んでいるのだ。

「暑うしてたまらんなア」この頃私には、こうして親しく言葉をかける相棒が二人ばかりあった。「松ちゃん」これは香月から歩いて来る駄菓子屋で、可愛い十五の少女であったが、間もなく「青島」へ芸者に売られて行ってしまった。「ひろちゃん」干物屋の売り子で、十三の少年だけれど、彼の理想は、一人前の坑夫になりたいことだった。酒が呑めて、ツルハシを一寸高く振りかざせば人が驚くし、町の連鎖劇は無料でみられるし、月の出た遠賀川のほとりを、私はこのひろちゃんたちの話を聞きながら帰ったものだった。——その頃よく均一という言葉が流行っていたけれど、私の扇子も均一の十銭で、鯉の絵や、七福神、富士山の絵が描いてある。骨はがんに、ような竹が七本ばかりついている。毎日平均二十本位はかたがけていった。緑色のペンキのはげた社宅の細君よりも、坑夫長屋をまわった方がはるかに扇子はさばけていった。外にラツパ長屋といって、一棟に十家族も住んでいる鮮人長屋もあった。アンペラの畳の上には玉葱をむいたような子供達が、裸で重なりあって遊んでいた。

烈々とした空の下には、掘りかえした土が口を開けて、雷のように遠くではトロッコの流れる音が聞えている。昼食時になると、蟻の塔

のように材木を組みわたした暗い坑道口から、泡のように湧いて出る坑夫達を待つて、幼い私はあっちこち扇子を売り歩いた。坑夫達の汗は水ではなくて、もう黒い餡のようであった。今、自分達が掘りかえした石炭土の上にゴロリと横になると、バクバクまるで金魚のように空気を吸ってよく眠った。まるでゴリラの群のようだった。

そうしてこの静かな景色の中に動いているものといえば、棟を流れて行く昔風なモッコである。昼食が終るとあちこちからもカチュウシヤの唄が流れて来ている。やがて夕顔の花のようなカンテラの灯が、薄い光で地を這って行くと、けたたましい警笛の音だ。国を出るときや玉の肌……何でもない唄声ではあるけれど、もうもうとした石炭土の山を見ていると何だか子供心にも切ないものがあつた。

扇子が売れなくなると、私は一つ一銭のアンパンを売り歩くようになった。炭坑まで小一里の道程を、よく休み休み私はアンパンをつまみ食いして行ったものだ。父はその頃、商売上の事から坑夫と喧嘩をして頭をグルグル手拭で巻いて宿にくすぽっていた。母は多賀神社のそばでバナナの露店を開いていた。無教に駅からなだれて来る者は、坑夫の群である。一山いくらのバナナは割によく売れて行った。アンパンを売りさばいて母のそばへ籠を置くと、私はよく多賀神社へ遊びに行った。そして大勢の女や男達と一緒に、私も馬の銅像に祈願をこめた。いい事がありますように。——多賀さんの祭には、きまつて雨が降る。多くの露店商人達は、駅のひさしや、多賀さんの境内を行ったり来たりして雨空を見上げていたものだった。

十月になって、炭坑にストライキがあつた。街中は、ジンと鼻をつまんだように静かになると、炭坑から来る坑夫達だけが殺気だつて活気があつた。ストライキ、さりとて辛いね。私はこんな唄も覚えた。炭坑のストライキは、始終の事で坑夫達はさっさと他の炭坑へ流れて行くのだそうだ。そのたびに、町の商人との取引は抹殺されてしま

ので、めったに坑夫達には品物を貸して帰れなかった、それでも坑夫相手の商売は、つとより早くてユカイだと商人達は言っていた。

*

「あんたも、四十過ぎとんなはっとじゃけん、少しは身を入れてくれんな、仕様がなかもんなた……」

私は豆ランプの灯のかげで、一生懸命探偵小説のジゴマを*読んでいた。裾にさしあつて寝ている母が父に何時もこうつぶやいていた。外はながい雨である。

「軒、家ちゆうもんを、定めんとあんた、こぎゃん時に困るけんな」「ほんにヤカマンかな」

父が小声で嘸鳴ると、あとは又雨の音だった。——そのころ、指の無い淫売婦だけは、いつも元気で酒を呑んでいた。

「戦争でも始まるとよかな」
この淫売婦の持論はいつも戦争の話だった。この世の中が、ひっつきかえるようになるかと言った。炭坑にうんと金が流れて来るといいと言っていた。「あんたは、ほんまによか生れつきな」母にこう言われると、指の無い淫売婦は、「小母っさんまで、そぎゃん思うとんなはると……」彼女は窓から何か投げては淋しそうに笑っていた。二十五だと言っていたが、労働者上りらしいプチプチした若さを持っていた。

十一月の声のかかる時であった。

黒崎からの帰り道、父と母と私は、大声で話しながら、軽い荷車を引いて、暗い遠賀川の堤防を歩いていた。

「お母さんも、お前も車へ乗れや、まだまだ遠いけに、歩くのは、しんどいぞ……」

母と私は、荷車の上に乗っかると、父は元気のいい声で唄いながら私達を引いて歩いた。

秋になると、星が幾つも流れて行く。もうじき、街の入口である。

後の方から、「おっさんよっ！」と呼ぶ声があった。渡り歩きの坑夫が呼んでいるらしかった。父は荷車を止めて「何ぞ！」と呼応した。二人の坑夫が這いながらついて来た。二日も食わないのだという。逃げて来たのかと父が聞いていた。二人共鮮人であった。折尾まで行くのだから、金を貸してくれと何度も頭をさげた。父は沈黙して五十銭銀貨を二枚出すと、一人ずつに握らせてやった。堤の上を冷たい風が吹いて行く。茫々とした二人の鮮人の頭の上に星が光っていて、妙にガクガク私たちは慄えていたが、二人共一円もらうと、私達の後を押して長い事沈黙して町までついて来た。

しばらくして父は祖父が死んだので、岡山へ田地を売りに帰って行った。少し資本をこしらえて来て、唐津物を糶売りをしてみた、これが唯一の目的であった。何によらず炭坑街で、つとより早く売れるものは、食物である。母のバナナと、私のアンパンは、雨が降りさえしなければ、二人の食べる位は売れて行った。馬屋の扱いは月二円二十銭で、今は母も家を一軒借りるよりこの方が楽だと言っていた。だが、どこまで行ってもみじめすぎる私達である。秋になると、神経痛で、母は何日も商売を休むし、父は田地を売ってたった四十円の金しか持って来なかった。父はその金で、唐津焼を仕入れると、佐世保へ一人で働きに行ってしまった。

「じき二人は呼ぶけんのう……」

こう言つて、父は陽に焼けた厚司一枚で汽車に乗って行った。私は一日も休めないアンパンの行商である。雨が降ると、直方の街中を軒並にアンパンを売って歩いた。

このころの思い出は一生忘れることは出来ないのだ。私には、三銭は一寸も苦痛ではなかった。一軒一軒歩いて行くと、五銭、二銭、商売は、自分とどんなに商売上手であるかを母に賞めてもらうのが楽しみであった。私は二カ月もアンパンを売って母と暮した。或る日、街から帰ると、美しいヒワ色の兵児帯を母が縫っていた。

「どぎゃんしたと？」

私は驚異の眼をみはったものだ。四国のお父つあんから送って来たのだと母は言っていた。私はなぜか胸が鳴っていた。間もなく、呼びに帰って来た養父と一緒に、私達三人は、直方を引きあげて、折尾行きの汽車に乗った。毎日あの道を歩いたのだ。汽車が遠賀川の鉄橋を越すと、堤にそった白い路が暮れそめていて、私の眼に悲しくうつるのであった。白帆が一ツ川上へ登っている、なつかしい景色である、汽車の中では、金鎖や、指輪や、風船、絵本などを売る商人が、長いことしゃべっていた。父は赤い硝子玉のはいった指輪を私に買ってくれたりした。

(十二月×日)

さいはての駅に下り立ち

雪あかり

さびしき町にあゆみ入りにき

雪が降っている。私はこの啄木の歌を偶々と思ひ浮べながら、郷愁のようなものを感じていた。便所の窓を明けると、夕方の門燈が薄明るくついていて、むかし信州の山で見たしゃくなげの紅い花のように、とても美しかった。

「婢やアお嬢ちゃんおんぶしておくれッ！」

奥さんの声がしている。

あああの百合子という子供は私には苦手だ。よく泣くし、先生に似ていて、神経が細くて全く火の玉を背負っているような感じである。——せめてこうして便所にはいつている時だけが、私の体のような気がする。

(バナナに鰻、豚カツに蜜柑、思いきりこんなものが食べてみたいな

ア)

気持ちが悪しくなってくると、私は妙に落書きをしたくなってくる。豚カツにバナナ、私は指で壁に書いてみた。

夕飯の支度の出来るまで赤ん坊をおぶって廊下を何度も行ったり来たりしている。秋江氏の家へ来て、今日で一週間あまりだけれど、先が目標もなさそうである。この先生は、日に幾度も梯子段を上ったり降りたりしている。まるで廿日嵐のようだ。あの神経には全くやりきれない。

「チャンチンコイチャン！ よく眠ったかい！」

私の肩を覗いては、先生は安心をしたようにじんじんばい、ふりをして二階へ上って行く。

私は廊下の本箱から、今日はチェーホフを引っぱり出して読んだ。

チェーホフは心の古里だ。チェーホフの吐息は、姿は、みな生きて、黄昏の私の心に、何かブツブツものを言いかけて来る。柔かい本の手ざわり、この先生の小説を読んでいると、もう一度チェーホフを読んでもいいのにも思った。京都のお女郎さんの話なんか、私には縁遠い世界だ。

夜。

家政婦のお菊さんが、台所で美味しそうな五目寿司を拵えているのを見てとても嬉しくなった。

赤ん坊を風呂に入れて、ひとしずまりすると、もう十一時である。

私は赤ん坊というものが大嫌いなだけれど、不思議な事に、赤ん坊は私の背中におぶさると、すぐウトウトと眠ってしまった、家の人達が珍しがっている。

お蔭で本が読めること——。年を取って子供が出来ると、仕事も手につかないほど心配になるのかも知れない。反感がおきるほど、先生が赤ん坊にハラハラしているのを見ると、女中なんて一生するものではないと思った。

うまごやしにだって、可憐な白い花が咲くってことを、先生は知ら

ないのかしら……。奥さんは野そぢぢな人だけれど、眠ったようなひとで、この家では私は一番好きなひとである。

(十二月×日)

ひまが出るなり。

別に行くところもない。大きな風呂敷包みを持って、汽車道の上に架った陸橋の上で、貰った紙包みを開いて見たら、たった二円はいつていた。二週間あまりも居て、金二円也。足の先から、冷たい血があるような思いだった。——ブラブラ大きな風呂敷包みをさげて歩いていると、何だかザラザラした気持ちで、何もかも投げ出したくなってきた。通りすがりに着いた瓦葺きの文化住宅の貸家があったので這入ってみる。庭が広くて、ガラス窓が十二月の風に磨いたように冷たく光っていた。

疲れて眠たくなっていたので、休んで行きたい気持ちなり、勝手口を開けてみると、錆びた雑話の心からゴロゴロ散らかっていて、座敷の畳が泥で汚れていた。昼間の空家は淋しいものだ。薄い人の影があそこにもここにもたたずんでいるようで、寒さがしみじみとこたえて来る。どこへ行くとういうあてもないのだ。二円ではどうにもならない。はばかりから出ると、荒れ果てた縁側のそばへ狐のような目をした犬がじっと見ている。

「何でもありません、何でもありませんよ」

言いさかせるつもりで、私は縁側の上へ屹とつたつたっていた。

(どうしようかなア……。どうにもならないじゃないのッ！)

夜。

新宿の旭町の木賃宿へ泊った。石崖の下の雪どけで、道が館このようにこねこねしている通りの旅人宿に、一泊三千銭で私は泥のような体を横たえることが出来た。三畳の部屋に豆ランプのついた、まるで明治時代になってありはしないような部屋の中に、明日の日の約束さ

れていない私は、私を捨てた島の男へ、たよりもならない長い手紙を書いてみた。

みんな嘘っぱちばかりの世界だった*

甲州行きを終列車が頭の上を走ってゆく

百貨店の屋上のように家々とした全生活を振り捨てて

私は木賃宿の布団に静脈を延ばしている

列車にフンサイされた死骸を

私は他人のように抱きしめてみた

真夜中に煤けた障子を明けると

こんなところにも空があつて月がおどけていた。

みなさまさよなら！

私は歪んだサイコロになってまた逆もどり

ここは木賃宿の屋根裏です

私は堆積された旅愁をつかんで

飄々と風に吹かれていた。

夜中になつても人が何時までもそうぞうしく出はいりをしてる。

「済みませんが……」

そういつて、ガタガタの障子をあけて、不意に銀杏返しに結った女が、乱暴に私の薄い布団にもぐり込んで来た。すぐそのあとから、大きい足音がすると、帽子もかぶらない薄汚れた男が、細めに障子をあけて声かけた。

「オイ！ お前、おきろ！」

やがて、女が一言二言何かつぶやきながら、廊下へ出て行くと、パチンと頬を殴る音が続けざまに聞えていたが、やがてまた外は無気味な、汚水のような冥々とした静かさになった。女の乱して行った部屋の空気が、なかなかしずまらない。

「今まで何をしていたのだ！ 原籍は、どこへ行く、年は、両親は……」

薄汚れた男が、また私の部屋へ這入って来て、鉛筆を嘗めながら、私の枕元に立っているのだ。

「お前はあの女と知合いか？」

「いいえ、不意にはいつて来たんですよ」

クヌウト・ハムスンだつて、こんな行きがかりは持たなかつたらう——。刑事が出て行くと、私は伸々と手足をのぼして枕の下に入れてある財布にさわってみた。残金は一円六十五銭也。月が風に吹かれているようで、歪んだ高い窓から色々な光の虹が私には見えてくる。——ビエロは高いところから飛び降りる事は上手だけれど、飛び上つてみせる芸当は容易じゃない、だが何とかなるだろう、食えないという事はないだろう……。

(十二月×日)

朝、青梅街道の入口の飯屋へ行った。熱いお茶を呑んでいると、ドロドロに汚れた労働者が駈け込むように這入って来て、

「姉さん！ 十銭で何か食わしてくれないかな、十銭玉一つぎりしかないんだ」

大声で言つて正直に立っている。すると、十五六の小娘が、

「御飯に肉豆腐でいいですか」と言つた。

労働者は急にニコニコして、バンコへ腰をかけた。

大きな飯井。葱と小間切れの肉豆腐。濁つた味噌汁。これだけが十銭玉一つの栄養食だ。労働者は天真に大口あけて飯を頬ばっている。涙ぐましい風景だつた。天井の壁には、一食十銭よりと書いてあるのに、十銭玉一つぎりのこの労働者は、すなおに大声で念を押しているのだ。私は涙ぐましい気持ちだつた。御飯の盛りが私のより多いような気がしたけれども、あれで足りるかしらとも思う。その労働者はいつて朗かだつた。私の前には、御飯にごった煮にお新香が運ばれて

きた。まことに貧しき山海の珍味である。合計十二銭也を払つて、のれんを出ると、どうもありがとうと女中さんが言ってくれる。お茶をたらふく呑んで、朝のあいさつを交わして、十二銭なのだ。どんづまりの世界は、光明と紙一重で、ほんとに朗かだと思ふ。だけど、あの四十近い労働者のことを思うと、これは又、十銭玉一ツで、失望、どんぞこ、墜落との紙一重なのではないだろうか——

お母さんだけでも東京へ来てくれれば、何とかどうにか働きようもあるのだけれど……沈むだけ沈んでチンポツしてしまつた私は難破船のようなものだ。飛沫がかかるところではない。ザンブザンブ潮水を呑んで、結局私も昨夜の淫売婦と、そう變つた考えも持っていない。あの女は三十すぎでいたかも知れない。私がかもしも男だつたら、あのまま一直線にあの夜の女に溺れてしまつて、今朝はもう二人で死ぬ話でもしていたかもしれない。

昼から荷物を宿屋にあずけて、神田の職業紹介所に行つてみる。

どこへ行つても砂原のように寥々とした思いをするので、私は胸がつまつた。

(お前さんに使つてもらうんじゃないよ)

おたんちゃん！

ひよつとこ！

馬鹿野郎！

何と冷たい、コウマンチキな女達なのだろう——。

桃色の吸取紙のようなカードを、紹介所の受付の女に渡すと、

「月給三十円位です……」

受付女史はこうつぶやくと、私の顔を見て、せせら笑っているのだ。

「女中じゃいけないの……事務員なんて、女学校出がうろろしているんだから駄目よ、女中なら沢山あつてよ」

後から後から美しい女の群が雪崩^{ゆきずみ}れて来ている。まことにごもつともさまなことです。

少しも得るところなし。

紹介状は、墨汁会社と、ガソリン嬢と、伊太利大使館の女中との三つだった。私のふところには、もう九十銭あまりしかないのだ。夕方宿へ帰ると、芸人達が、植木鉢みたいに鏡の前に並んで、鼠色のお白粉を顔へ塗りたくっている。

「昨夜は二分しか売れなかった」

「藪^{やぶ}腕^{でん}みじヤア買手がねえや！」

「へん、これだっというって人があるんだから……」

「ハイ御苦労様なことですよ」

十四五の娘同士のはなしなり。

(十二月×日)

こみあげてくる波のような哀しみ、まるで狂人になるような錯覚がおこる。マツチをすって、それで眉^{まゆ}ずみをつけてみた。——午前十時。麹町三年町の伊太利大使館へ行ってみた。

笑って暮らしましょう。でも何だか顔がゆがみます。——異人の子が馬に乗って門から出てきた。門のそばにはこわれた門番の小屋み

いなものがあって、綺麗な砂利が遠い玄関までつづいている。私のような女の来るところではないように思えた。地図のある、赤いジュウタンの広い室に通された。白と黒のコスチュウム、異人のおくさんって美しいと思う。遠くで見ているとなおさら美しい。さっき馬で出て行った男の子が鼻を鳴らしながら帰って来た。男の異人さんも出て来たけれど、大使さんではなく、書記官だとかっていうことだった。夫婦とも背が高くアツパクを感じる。その白と黒のコスチュウムをつけた夫人にコック部屋を見せてもらった。コンクリートの箱の中には玉葱がゴロゴロしていて、七輪が二つ置いてあった。この七輪で、女中が自分の食べるのだけ煮たきするのだと言うことだ。まるで廢屋の

ような女中部屋である。黒い錠戸^{じょうど}がおりていて石鹼のような外国の臭いがしている。

結局^{けつぎゆ}より、よりを得ないままで門を出てしまった。豪壯な三年町の邸町を抜けて坂を降りると、吹きあげる十二月の風に、商店の赤い旗がヒラヒラして心にしみた。人種が違っては人情も判りかねる、どこか他をさがしてみようかしら。電車に乗らないで、濠^{わう}ばたを歩いていると、何となく故郷へ帰りたくなって来た。目当もないのに東京でまごついていたところで結局はどうにもならないと思う。電車を見ていると死ぬる事を考えるなり。

本郷の前の家へ行ってみる。小母^{おぼ}さんつめたし。近松氏から郵便が来ていた。出る時に十二社の吉井さんのところに女中が入用だから、ひよっとしたらあんたを世話してあげようという先生の言葉だったけれど、その手紙は薄^{うす}ずみで書いた断り状だった。

文士^{ぶんし}って薄情なかも知れない。

夕方新宿の街を歩いていると、何ということもなく男の人にすがりたくなっていた。(誰か、このいまの私を助けてくれる人はないものかしら……)新宿駅の陸橋に、紫色のシグナルが光ってゆれているのをじっと見ていると、涙で臉がふくらんできて、私は子供のようにしゃくりが出てきた。

何でも当^{あた}ってくだけてみようと思う。宿屋の小母さんに正直に話をしてみた。仕事^{しごと}がみつかるまで、下で一緒にいていいと言^いってくれた。

「あんた、青バス^{あおバス}の車掌さんにならないかね、いいのになると七十円位這入るぞうだが……」

どこかでハタハタでも焼いているのか、とても臭いにおいが流れて来る。七十円もはいれば素敵なことだ。とにかくブラさがるところをこしらえなくてはならない……十燭^{じゅうたく}の電気^{でんき}のついた帳場の炬燵^{かまど}にあたって、お母アさんへの手紙を書く。

——ピョウキシテ、コマツテ、イルカラ、三円クメンシテ、オクツ